

「～と思う」およびその引用節内の動詞の主体について

横田 淳子

(1997. 10. 31 受)

1. はじめに

「～と思う」は、ほとんどの初級の日本語教科書に取り上げられており、初級の後半の文型・語彙項目とみなされている⁽¹⁾と考えられる。「と」の前の引用節の中では用言の普通形が使われるために、文型積み上げシラバスにおいては、「言う」と同じように、動詞やコプラの普通体を提示する場として使われることが多い⁽²⁾。その際に、主文が過去になっても引用節のテンスは変わらないという、英語での「時制の一致」との違いを述べ、接続の形に注意しているものもあるが、それ以上に「～と思う」を取り上げ、その細かい使い方に言及したものは少ない。

しかし、学習者が「～と思う」を実際に言語活動において使用する際、つまり「～と思う」を含む文を読んだり書いたりする時、「思う」の主体を取り違えたり、「～と思う」と「～と思っている」の使い分けが正しくできなかつたりということがよくある⁽³⁾。正しい使い方を習得させるためには、「～と思う」の使い方の形式面だけでなく、その意味・用法をきちんと整理して教える必要があると思われる。それは、「思う」自体が他の動詞と比べていくつかの特徴をもっており、使い方には注意を要すべき点が多々あるからである。

思考動詞「思う」は、「～と思う」のほかに「～を思う」や「～に思う」「～く思う」という形をとり、いずれも「思う」の内容を表すが、本論では「～と思う」に限定してその使い方の規則性を探り、さらに日本語指導における留意点についても言及することとする。

(1) 『日本語能力試験出題基準』では、「～と思う」は「文字・語彙項目」「文法項目」ともに3級に分類されている。p. 23およびp. 142参照。

(2) 『初級日本語』、『日本語初歩』、An Introduction to Modern Japaneseなどの教科書参照。

(3) 市川(1997)は「と思う」の項(pp. 281-287)で、学生の誤用例をまとめている。

2. 思考動詞「思う」

日本語教科書や指導参考書、先行研究を踏まえて、思考動詞「思う」に関して簡単にまとめると以下ようになる。

2-1 「考える」との違い

まず、「～と思う」の用法を考えるにあたって、同じ思考動詞である「考える」との違いを明らかにし、「思う」の基本的な意味を把握しておくこととする⁽⁴⁾。

二つの動詞の基本的な違いは、「思う」が心の働きを表すのに対し、「考える」は頭の働きを表す点である。そのため、「問題を解く」のような論理的な頭の働きを必要とする場面では「考える」を使うことはできるが、「思う」を使うことはできない。

① a この問題を考える。

b *この問題を思う。（*印は非文法的な文、以下同様）

反対に、「悲しい」「寒い」「なつかしい」などのような感覚的な心の働きを表す時には、「思う」は使えるが「考える」は使えない。

② a *寒いと考える。

b 寒いと思う。

しかし、実際の使われ方では、論理的な頭の働きの結果を述べる場面でも「思う」が使われることが多い。

③ a 今後の経済発展のためには自由化が必要だと思います。

b 今後の経済発展のためには自由化が必要だと考えます。

これは「個人的な意見を述べる」または「個人のある判断を表す」場合に使われる用法で、「思う」のかわりにももちろん「考える」を使うこともできるが、その場合には「思う」を用いた時に比べて論理的な推論の結果であることを強調した言い方となる。

以上のことから、「思う」は、本来心の働きを表す動詞であるが、個人的な判断であると少々遠慮した気持ちをもって自分の考えを表明する場合には、頭の働きの結果を表す場合にもよく使われるとまとめられる。

(4) 「思う」と「考える」の意味の違いに関しては、『日本語学習使い分け辞典』(pp. 179-182) および『ことばの意味2 辞書にかいていないこと』(pp. 104-112)を参考にまとめた。

2-2 基本形⁽⁵⁾が表す現在の判断・主張

「思う」は、動作を表す一般の動詞（「見る」や「食べる」など）とは異なって、文末において基本形で使われるときは常に現在の判断・主張を表している。これは同じ思考動詞である「考える」も同様である。

④ a 彼は来週会社をやめると思う。

b 彼は来週会社をやめる。

「やめる」は来週のことであり、話している現時点のことではないが、文末の「思う」は基本形で現在の動作を表している。

それでは、一般の動詞は「～ている」がついた形で現在の動作の進行の状態を表すが、「思う」の「～ている」がついた形である「～と思っている」はどのようなアスペクトを表すのであろうか。

⑤ 彼に責任があると思っています。

この場合は、話し手が現時点よりも少し前にそう思い、現在までそう思い続けていることが示される⁽⁶⁾。「～と思う」が単に現時点での話し手の思考内容を述べているのと比べると、「～と思っている」は現在をさかのぼるある一定の期間が意識され、その期間その内容を思い続けていると解釈される。

⑥ a 夏休みに北海道へ行きたいと思っています／思います。

b 経済を勉強しようと思っています／思います。

話し手の希望や意志を表現する「～たい」や「～（よ）う」が引用節に来る場合は、単に話している現時点だけでなく日頃からそのような希望や意志をもっていることを表すために「～と思っている」がよく使われるが、思考期間を特に意識しない場合は「～と思う」で表すことももちろんできる。

2-3 人称制限

「思う」が文末で基本形で使われるときは、「思う」の主体は話し手である。

(5) 辞書の見出し語として使われる形である「辞書形」や、その丁寧体である「ます形」を指す。

(6) 『教師用日本語教育ハンドブック③文法Ⅰ』（pp. 119-120）では、「～と思う」は瞬間動詞として指導するのがよいと述べ、「～と思っている」は「思ったこと」が現在も続いている状態であると解釈している。

「～と思っている」の場合、「思う」の主体が三人称である可能性もあるが、その点については2-3参照。

感情形容詞の「うれしい」「悲しい」などと同様、「思う」も人の心の中のことであり、外からは直接知ることができないことである。そのために、「思う」の主体は通常の文（小説など）が主語では話し手であり、三人称には使えないという人称制限がある。その結果、「思う」の主体である「わたしは」はあえて言う必要がなくなり、省かれることが多い。聞き手に対しては「～と思うか」のような質問文の中でなら使えるが、この場合も「思う」の主体は聞き手に決まっているので、省略されることが普通である。

⑦ a (わたしは) このテレビは大変安いと思います。

b *彼はこのテレビは大変安いと思います。

c (あなたは) このテレビは大変安いと思いますか。

「～と思っている」ならば、三人称にも使える。これは、「～と思っている」は2-2で述べたように現在をさかのぼるある時点から現在までの一定期間思い続けているということで、すでに「思う」の主体が単に心の中でひそかに思うだけではなく、その人が思っているということが客観的な事実として外に現れていると考えられるからである。「思った」も同様の理由から三人称にも使えると一般に言われている⁽⁷⁾。

⑧ a 彼はこのテレビは大変安いと思っている。

b 彼はこのテレビは大変安いと思った。

2-4 「～と思う」の意味・用法

次の二つの文は「～と思う」の同じ文型の中に含まれて提出されている⁽⁸⁾が、「～と思う」の意味・用法を考えると、異なるのではないだろうか。

⑨ a わたしはきのう小林さんは学校を休んだと思います。

b (わたしは) きのうのテストはやさしかったと思います。

⑨ a、⑨ bともに「思う」の主体は話し手であるが、⑨ aが客観的な事実を不確実な個人的な情報として表現しているのに対して、⑨ bは個人の意見を述べてい

(7) これに対して、金水(1995)は、心的状態にかかわる動詞の主語について、「た」がついても人称制限は残り、三人称に使えるのは小説や物語の地の文「語り」の中であり、日常的に聞き手にある状況を知らせる「報告」の文の中では許容性が落ちるのではないかと述べている。この点に関しては、今回のアンケート結果でもある程度の傾向は出て来たが、十分に検討していない。

(8) 『初級日本語』 p. 103.

るものである。

⑨aのような用法は、引用節内の伝達内容を客観的事実としてではなく、話し手の不確実な情報として表現するために「～と思う」を用いているものである。したがって、伝達内容を「～と思う」を用いずそのまま表現した場合（「彼はきのう学校を休んだ。」）とは明らかに異なる。話し手の思考することを表現しているのだということを表す意味で「～と思う」は必要である。

⑨bのような用法は、話し手の主観的な気持ち・意見を表現しているという点で、むしろ⑥の各例文の中の「～（よ）うと思う」や「～たいと思う」の「～と思う」と同じである。これらの「～と思う」は、「～と思う」を用いずに引用節内の内容を言い切りの形で表現しても意味的には変わらない。「～と思う」は、話し手の意見や意志や希望をそのままの形で表現するとあまりにも直接的になるために、表現を和らげるために添えているのである。この点で、⑨aのような「～と思う」の用法と異なる。

多くの日本語の初級教科書や指導参考書では、引用節内の動詞の形が意志形になるために、「～（よ）うと思う／思っている」を一つの表現形式として捉え、「～と思う」とは別の項目にしている⁽⁹⁾が、「～と思う」の意味・用法から言えば、「～（よ）うと思う／思っている」は⑨bの意味・用法に含まれるとも言える。

「～と思う」の基本的な意味・用法についてまとめると、「～と思う」の意味・用法は、引用節にくる情報内容の種類によって二つに分けられる。一つは「不確実表示用法」⁽¹⁰⁾で、情報内容としては客観的事実として扱える内容の文（例えば、⑨aの「彼はきのう学校を休んだ」）がくるが、それを不確実な個人的な情報として表現するものである。もう一つは「主観明示用法」⁽¹¹⁾で、⑨bや⑩の文例のように意見、希望、推量などの話し手の主観的な思考内容を表現するものである。不確実性を表すのではなく、むしろ、意見や主張が個人的なものであることを明示し、それによって意見や主張を和らげて表現する機能をもっている。

⑩a 留学した方がいいだろうと思います。

(9) 注(2)の教科書や、A Dictionary of Basic Japanese Grammar『日本語基本文法辞典』(pp. 569-571), 『基礎表現50とその教え方』(pp. 66-69), 『教師用日本語教育ハンドブック③文法I』(pp. 119-120)などの指導参考書参照。

(10) 森山の用語を使用。森山卓郎(1992) pp. 106-110。

(11) 森山の用語を使用。森山卓郎(1992) pp. 110-113。

b ここで祝電をご披露したいと思います。

「主観明示用法」は、「思う」の主体が話し手である場合にだけ出てくるものである。「思う」の主体が三人称である場合は、他者の意見、希望、推量などは直接知ることはできず、言い切りの形では表現できないために、「～と思っている」や「～と思っているようだ」「～と思っているらしい」を使うこととなるが、これらの場合は、「思う」が使われているからといって、意見や主張を和らげて表現する機能は果たしていない。

3 「～と思う」の引用節

「～と思う」が、文末で基本形で使われた場合、「思う」の主体は話し手であるから普通「わたしは」は省かれる。そのため、引用節内に動詞があると、その動詞の主体がだれであるのか学習者にはわかりにくくなる。日本語母語話者は前後の文脈から判断していることが多いと思われるが、規則性はないのだろうか。

前述のように、日本語教育においては「～と思う」の引用節は動詞やコプラの普通体を提示する場として使われることが多い。動詞「行く」に例をとれば、「行く」「行かない」「行った」「行かなかった」「行こう」のような普通体が引用節内に入り、コプラ「です」を例にとれば、「だ」「ではない」「だった」「ではなかった」「だろう」などが入る。それでは、動詞の形の違いから、「思う」の主体と引用節の中の動詞の主体がだれであるか決まってくることはないのだろうか。

最初に、「～と思う」の引用節の中の動詞が「行く」「行こう」「行くだろう」の場合、これらの動詞の主体をだれと考えるのが自然なのか、だれと考える可能性があるのかを、文末の「思う」は固定した形にして検討してみる。

- ① a 来週行くと思う。
- b 来週行こうと思う。
- c 来週行くだろうと思う。

① a の「行く」は、文末で使われる場合は、話し手の意志および未来の事態、または第三者の未来の事態を表すが、「～と思う」の引用節の中に入れてもこれは同様であろうか。

まず、「行く」の主体を話し手であるとした場合を検討してみる。話し手の積極的な意志を表すには「行こうと思う」の形があり、「行くと思う」では話し手の積極的な意志は表せない。「行くと思う」の形で、話し手の未来の事態を表す

ことは可能であるが、この場合には、自分の意志とは関係なく、回りの状況から自然とその動作を取るということになるといった、自分の動作ではあるが状況まかせとといったような感じが含まれる。したがって、次の⑫の「受かる」のように、動詞が表す動作が主体の意志でコントロールしにくい場合には、「受かる」が話し手の未来の事態を表すことが可能となる。

⑫ たぶんあの大学には受かると思います。

⑪ aの「行く」を第三者の未来の事態を表すと考えるのはどうであろうか。特別な文脈を考えない場合は、こう考えるのが一番自然であろう。つまり、「行く」の主体は、「思う」の主体である話し手とは異なった第三者となる。

⑪ bの「行こう」は話し手の意志を表す。「～と思う」は主観明示用法であり、基本的には、⑪ bは「来週行こう」と同じ意味になる。したがって、「行く」の主体は「思う」の主体である話し手と同じにならなければならない。

⑪ cの「行くだらう」は話し手の推量を表す。「～と思う」はやはり主観明示用法であり、基本的には、⑪ cは「来週行くだらう」と同じ意味になる。この場合、「行く」の主体は「思う」の主体である話し手とは異なった第三者と考えられる。そうでないと、自分自身の動作に対して責任をもたない第三者的な表現になり、不自然な感じがするからである。ただし、⑪ aの場合と同様に自分の意志でコントロールできない動作「(試験に)受かる／落ちる」「(試合に)勝つ／負ける」などの場合は、自分の動作であっても「多分受かるだろう」「勝つだろう」などと言うことが可能である。したがって、動詞が自分の意志でコントロールできない動作を表す場合には、「行く」の主体を「思う」の主体である話し手と同じであると考えられることもできる。

以上の考察から、引用節内の動詞の主体に関しては、次のような仮説が立てられる。

- (1) 引用節内の動詞が「辞書形」の場合、その動詞の主体と「思う」の主体は異なる。ただし、引用節内の動詞が表す動作が主体の意志でコントロールしにくい場合は、「思う」の主体と同じになる可能性もある。
- (2) 引用節内の動詞が意志形「～(よ)う」の場合、その動詞の主体と「思う」の主体は同じになる。
- (3) 引用節内の動詞が「辞書形+だらう」の形の場合、その動詞の主体と「思う」の主体は異なる。ただし、引用節内の動詞が表す動作が主体の意志でコントロールしにくい場合は、「思う」の主体と同じになる可能性もある。

4 仮説の検証

前節の仮説を検証するために、引用節内の動詞の主体と文末の「思う」の主体を問うアンケート調査（資料参照）を日本語母語話者に対して行った。

4-1 被験者

被験者は20代前半までの大学生26名（男性5名、女性21名）と20代後半から30代前半に属する大学生1名（女性）の計27名である。日本語教授法を学んでいるグループであるが、「～と思う」に関して特別な講義を受けているわけではない。

4-2 調査内容

引用節内の意志動詞としては「行く」を用いた。「行く」の3つの形「行く」「行こう」「行くだらう」と、文末の「思う」の3つの形「思う」「思っている」「思った」を組み合わせて9つの単文（文例1 a～9 a）を作り、それぞれの「行く」「思う」の主体が誰であるかを、話し手、三人称（山田さん）、第三者の中から選んでもらった。

動詞の表す動作が主体の意志でコントロールしにくい動詞としては「勝つ」を用いた。「行く」と同様に、「勝つ」の3つの形「勝つ」「勝とう」「勝つだらう」と文末の「思う」の3つの形「思う」「思っている」「思った」を組み合わせて9つの単文（文例1 b～9 b）を作り、それぞれの「勝つ」「思う」の主体が誰であるかを、話し手、三人称（山田さん）、第三者の中から選んでもらった。

アンケートでは、「主体」という言葉はわかりにくいと考えて使わず、「動作主」という言葉を使って質問した。

4-3 調査日

アンケート調査は、1997年10月1日に日本語教授法の教室で行った⁽¹²⁾。

(12) アンケート実施にあたっては、本センター教官の伊東祐郎氏に協力していただいた。

(表1 アンケート結果)

文 例	行く／思う (27名)	勝つ／思う (27名)
1 a 山田さんは行くと思う。 b 山田さんは勝つと思う。 Y I * T Y * I I	27 (100) 0 (0) 0 (0)	24 (89) 1 (4) 2 (7)
2 a 山田さんは行くと思っている。 b 山田さんは勝つと思っている。 Y T T Y Y Y I Y Y I	10 (37) 9 (33) 6 (22) 2 (7) 0 (0)	5 (19) 4 (15) 14 (52) 1 (4) 3 (11)
3 a 山田さんは行くと思った。 b 山田さんは勝つと思った。 Y I T Y I Y Y Y Y T 無答	23 (85) 2 (7) 1 (4) 0 (0) 0 (0) 1 (4)	20 (74) 1 (4) 0 (0) 5 (19) 1 (4) 0 (0)
4 a 山田さんは行こうと思う。 b 山田さんは勝とうと思う。 * Y Y * T I * I T	25 (93) 1 (4) 1 (4)	27 (100) 0 (0) 0 (0)
5 a 山田さんは行こうと思っている。 b 山田さんは勝とうと思っている。 Y Y * Y T * Y I	26 (96) 0 (0) 1 (4)	25 (93) 1 (4) 1 (4)
6 a 山田さんは行こうと思った。 b 山田さんは勝とうと思った。 Y Y * Y I	26 (96) 1 (4)	27 (100) 0 (0)
7 a 山田さんは行くだろうと思う。 b 山田さんは勝つだろうと思う。 Y I * I I * T Y	20 (74) 3 (11) 1 (4)	21 (78) 2 (7) 3 (11)

* Y	T	1	(4)	1	(4)
* T	T	1	(4)	0	(0)
* Y	Y	1	(4)	0	(0)
8 a 山田さんは行くだろうと思っている。 b 山田さんは勝つだろうと思っている。					
Y	T	10	(37)	6	(22)
T	Y	7	(26)	9	(33)
Y	I	6	(22)	6	(22)
Y	Y	1	(4)	4	(15)
* I	T	1	(4)	1	(4)
* T	T	1	(4)	1	(4)
* I	I	1	(4)	0	(0)
9 a 山田さんは行くだろうと思った。 b 山田さんは勝つだろうと思った。					
Y	I	21	(78)	17	(63)
T	Y	3	(11)	6	(22)
Y	Y	0	(0)	2	(7)
* I	I	3	(11)	1	(4)
* T	I	0	(0)	1	(4)

Y=山田さん、I=話し手、T=第三者
括弧内は百分率：小数点以下で四捨五入

4-4 調査結果

「行く」「思う」または「勝つ」「思う」の主体がだれであるか、被験者が選んだ組み合わせごとに集計し、結果をまとめた(表1)。9つの文例の各動詞の下のアルファベットは、各動詞の表す動作の主体をそれぞれ、山田さん=Y、話し手=I、第三者=Tと判断した組み合わせを示している。例えば、1aの文例では、「行く」の主体を「山田さん」、「思う」の主体を「話し手」と判断した被験者が27名中27名で100%である。1bの文例では、「勝つ」の主体を「山田さん」、「思う」の主体を「話し手」と判断した被験者が27名中24名で89%⁽¹³⁾である。
*印は、「思う」の人称制限および仮説からは導き出されないはずの組み合わせであることを示している。

(13) 小数点以下を四捨五入にしたために、合計が100%にならない場合もある。

4-5 結果の考察

文例1、2、3は引用節内の動詞が辞書形である。

文例1の文末には「思う」と基本形がきているので、「思う」の主体は人称制限から自動的に「話し手」となる。引用節内の動詞の主体については、「山田さん」とした被験者が、文例1 aの「行く」の場合は100%、1 bの「勝つ」の場合は89%である。文例1 aに関しては全員が文法的に許容される組み合わせを選んでいるが、1 bに関しては11%が非文法的な組み合わせを選んでいる。この違いは動詞の種類の違いからくるのであろうか。

文例2は文末が「思っている」になっている。「思っている」の主体は文法的には「山田さん」でも「第三者」でも「話し手」でも可能であるが、「話し手」とした被験者は、文例2 aではゼロ、2 bでも11%しかいない。残りは「山田さん」または「第三者」を選んでいる。「思っている」の主体を「第三者」と判断した被験者は2 aで37%、2 bで19%であるが、これらの被験者は2 a、2 bとも全員が、引用節内の動詞の主体は別の人物つまり「山田さん」と判断している。

「思っている」の主体を「山田さん」とした被験者は2 aで62%、2 bで71%である。「思っている」の主体を「山田さん」とした被験者のうち、引用節内の動詞の主体を「山田さん」とは異なる「第三者」と判断した者は、2 aでは53%、2 bでは21%であるが、「話し手」と判断した者は、2 aでは12%、2 bでは5%に過ぎない。反対に、引用節内の動詞の主体を「思っている」の主体と同じ人物つまり「山田さん」と判断した者は、「思っている」の主体を「山田さん」とした被験者のうち、2 aでは35%であるのに対して、2 bでは74%にもなっている。

つまり、文例2 aの場合は、「行く」の主体と「思っている」の主体は異なると判断した被験者が77%、同じであると判断した被験者が22%であるのに対し、2 bの場合は、「勝つ」の主体と「思っている」の主体は異なると判断した被験者が49%と約半数に過ぎず、「勝つ」の主体も「思っている」の主体も同じであると判断した者が52%もいるのである。これは明らかに「行く」と「勝つ」の動詞の種類に違いによるものであろう。

文例3では文末が「思った」になっている。「思った」の主体は「話し手」でも「山田さん」でも「第三者」でも一応可能であるが、「話し手」とした被験者が、文例3 aでは85%、3 bでは74%となり、多数を占めている。「思った」の

主体は「話し手」と考えるのがやはり一番自然なのであろう。「思った」の主体を「話し手」とした被験者は全員、引用節内の動詞の主体を別の人物つまり「山田さん」とであると判断している。一方、「思った」の主体を「山田さん」と判断した被験者のうち、引用節内の動詞の主体を「思った」の主体と同じ人物、つまり「山田さん」とした被験者は、3 a ではゼロであるが、3 b では19%もいる。これも「行く」と「勝つ」の動詞の種類の違いが強く影響していると思われる。

以上の結果から、仮説(1)『引用節内の動詞が「辞書形」の場合、その動詞の主体と「思う」の主体は異なる。ただし、引用節内の動詞が表す動作が主体の意志でコントロールしにくい場合は、「思う」の主体と同じになる可能性もある。』は支持されたと考えられる。

文例4、5、6は引用節内の動詞が意志形「～(よ)う」になっている。

文例4の文末には「思う」と基本形がきているので、普通は「思う」の主体は人称制限から「話し手」となる。しかし、文例4では引用節内の動詞が「～(よ)う」になっており、そのため、文例4は普通の文ではなく、小説などの中で使われる特殊な文であると考えられる。調査結果では、「思う」の主体を「話し手」と考えた被験者は文例4 a で一人いるだけである。引用節内の動詞が「～(よ)う」になっているために、引用節内の動詞の主体と「思う」の主体は同一の人物つまり「山田さん」とであると判断した被験者が、4 a の場合は93%、4 b の場合は100%になる。これは、引用節の中が「行こう」「勝とう」と意志形になっているため、これらの動作の主体と「思う」の主体は同じであると考え、その結果、「思う」の主体も山田さんであるととらえた結果だと考えられる。このことから、「思う」の人称制限と仮説(2)が矛盾するときには仮説(2)の方が優勢に働くと言えよう。

文例5および文例6も引用節の中に動詞の意志形「行こう」「勝とう」をもつものである。文例5 a の場合は96%、5 b の場合は93%が、文例6 a の場合は96%、6 b の場合は100%が両方の動詞の主体を同一の人つまり「山田さん」とであると判断している。以上から仮説(2)は支持されたと見えよう。

文例7、8、9は引用節内の動詞が「辞書形+だろう」の形である。

文例7の文末には「思う」と基本形がきているので、「思う」の主体は人称制限により自動的に「話し手」となる。7 a、7 b の場合とも85%が「思う」の主体として「話し手」を選んでいる。引用節内の動詞の主体としては「山田さん」

を選択している被験者が、7 aの場合は74%、7 bの場合は78%と多いが、「思う」の主体として「話し手」を選択した結果、引用節内の動詞の主体として文の中に残っている「山田さん」を選択せざるを得なかったとも考えられる。引用節内の動詞が「辞書形+だろう」の形であるという理由から、両者の動詞の主体が異なると判断した結果であるかどうかは明らかではない。

文例8は文末が「思っている」になっている。「思っている」の主体は文法的には「山田さん」でも「第三者」でも「話し手」でも可能である。文法的に可能な文の中で、「思っている」の主体を「山田さん」と判断している被験者は、8 aの場合は26%、8 bの場合は48%である。「思っている」の主体を「第三者」と判断している被験者は、8 aの場合は44%、8 bの場合は22%である。「思っている」の主体を「話し手」と判断している被験者は、8 aの場合は22%、8 bの場合も22%である。

8 aの場合は「思っている」の主体を「第三者」、引用節内の動詞の主体を「山田さん」と判断した被験者が37%で一番多いが、8 bの場合は反対に「思っている」の主体を「山田さん」、引用節内の動詞の主体を「第三者」とした被験者が33%で一番多い。しかし、この違いが有意差といえるのかどうかは明らかではない。

「思っている」の主体と引用節内の動詞の主体は異なると判断した被験者の合計は8 aで85%、8 bで81%になる。「思っている」の主体と引用節内の動詞の主体を両方とも同じであると判断した被験者は、8 aでは4%しかいないのに対して、8 bでは15%いる。この違いは、今までの文例でも見てきたように、「行く」と「勝つ」の動詞の種類の違いによるのではないだろうか。

文例9は文末が「思った」になっている。「思った」の主体は「話し手」でも「山田さん」でも「第三者」でも可能であると言えるが、「話し手」として判断した被験者が、9 aでは78%（非文法的な組み合わせも入れると89%）、9 bでは63%（非文法的な組み合わせも入れると67%）で、やはり一番多い。ただし、「思った」の主体を「山田さん」として判断した被験者は、9 aでは11%であるが、9 bでは30%である。

「思った」の主体と引用節内の動詞の主体は異なると判断している被験者は、9 aでも9 bでも89%である。「思った」の主体と引用節内の動詞の主体を同じ「山田さん」として判断した被験者は、9 aではゼロであるが、9 bでは7%いる。これらの違いが「行く」と「勝つ」の動詞の種類の違いによるのかどうか

は明らかではない。

以上の結果から、仮説(3)『引用節内の動詞が「辞書形+だろう」の形の場合、その動詞の主体と「思う」の主体は異なる。ただし、引用節内の動詞が表す動作が主体の意志でコントロールしにくい場合は、「思う」の主体と同じになる可能性もある』はほぼ支持されたとと言えるが、引用節内の動詞が「辞書形+だろう」の形の場合は、「辞書形」である場合と比べると、「思う」の主体と同じになる可能性は低いようである。

5 おわりに

今回のアンケートの調査は被験者数が少ない小規模なものであり、結果も単純に百分率を出したに過ぎず、統計的な処理を行っていない。そのため、結論を述べることは難しく、仮説の検証においても、今回のアンケート調査内で言うことを述べたに過ぎない。今後、さらに多くの調査をし、検討をしていくことが必要であるが、現時点で明らかになったこととして、学習者が「～と思う」を学ぶ際に、以下のようないくつかの留意点を与えることは可能であろう。

- (1) 「思う」の主体が話し手である場合は、「～と思う／思います」のように基本形を用いるのが原則である。「～と思っている／思っています」は、話し手が期間を特に意識して表したいときにだけ使う。
「～(よ)うと思う」と「～(よ)うと思っている」の違いも同様である。
- (2) 「～と思う」の主体が三人称の場合は、「～と思う／思います」を使うことはできない。「～と思っている／思っています」を使う。さらに「～と思っている／思っています」に「らしい」「ようだ」などをつけてもよい。
- (3) 引用節の中の動詞の「意志形」の主体と「～と思う」の主体は必ず同じになる。
- (4) 多くの場合、引用節の中の動詞の「辞書形+だろう」の主体と「～と思う」の主体は異なる。

「～と思う」に関しては、アスペクトとムードの両方の問題が関係している。ムードに関しては語用論的側面⁽¹⁴⁾が無視できない。今後、非母語話者にいかに効率的に日本語を教えるかという観点から、「～と思う」の構文的側面のほかに語用論的側面の規則性についてさらに検討をしていく必要がある。

(14) 浅野裕子(1996)は「～と思う」の文形を選択する基準として、日本語では「情報を共有する他者の事実認識はいかなるものか」「他者がいかに判断するか」という尺度が優先されるとまとめている(p. 185)。

参考文献

- 浅野裕子 (1996) 「「情報のなわ張り」と日英の文形選択基準—「と思う」を中心に—」『世界の日本語教育』6号、国際交流基金、pp. 169-184.
- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 金水 敏 (1995) 「「報告」についての覚書」『日本語のモダリティ』くろしお出版、pp. 121-129.
- 国際交流基金 (1989) 『教師用日本語教育ハンドブック③文法 I』
- 国際交流基金日本語国際センター (1989) 『日本語初歩』凡人社
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (1994) 『日本語能力試験出題基準』国際交流基金
- 柴田 武編 (1994) 『ことばの意味 2 辞書にかいていないこと』平凡社
- 砂川有里子 (1996) 『日本語文法セルフマスターシリーズ 2 する・した・している』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1986) 『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター (1995) 『初級日本語』凡人社
- 富田隆行 (1992) 『基礎表現 50 とその教え方』凡人社
- 広瀬正宜、庄司香久子 (1994) 『日本語学習使い分け辞典』講談社インターナショナル
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐる」『日本語学』Vol. 11
8月号、明治書院、pp. 105-116.
- S. Makino & M. Tsutsui (1986) A Dictionary of Basic Japanese Grammar, The Japan Times.
- O. Mizutani & N. Mizutani (1989) An Introduction to Modern Japanese, The Japan Times.

[資料]

次の文を読んで、あまり深く考えずに直感で答えてください。

次の文の「行く」「思う」の動作主はそれぞれ誰でしょう。

山田さんと思う場合はYを、話し手と思う場合はIを、第三者と思う場合はTを丸で囲んでください。

		「行く」		「思う」			
1	山田さんは行くと思う	Y	I	T	Y	I	T
2	山田さんは行くと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
3	山田さんは行くと思った。	Y	I	T	Y	I	T
4	山田さんは行こうと思う。	Y	I	T	Y	I	T
5	山田さんは行こうと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
6	山田さんは行こうと思った。	Y	I	T	Y	I	T
7	山田さんは行くだろうと思う。	Y	I	T	Y	I	T
8	山田さんは行くだろうと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
9	山田さんは行くだろうと思った。	Y	I	T	Y	I	T

次の文の「勝つ」「思う」の動作主はそれぞれ誰でしょう。

山田さんと思う場合はYを、話し手と思う場合はIを、第三者と思う場合はTを丸で囲んでください。

		「勝つ」		「思う」			
1	山田さんは勝つと思う	Y	I	T	Y	I	T
2	山田さんは勝つと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
3	山田さんは勝つと思った。	Y	I	T	Y	I	T
4	山田さんは勝とうと思う。	Y	I	T	Y	I	T
5	山田さんは勝とうと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
6	山田さんは勝とうと思った。	Y	I	T	Y	I	T
7	山田さんは勝つだろうと思う。	Y	I	T	Y	I	T
8	山田さんは勝つだろうと思っている。	Y	I	T	Y	I	T
9	山田さんは勝つだろうと思った。	Y	I	T	Y	I	T

*以下の情報もご記入ください。

性別：男 女

年齢：15～25歳、26～35歳、36歳～45歳、46歳以上

現在までの主な生活の場：_____都・道・府・県

***** ありがとうございました。 *****

On the Subjects of "~ to omou" and the Verb in the Quotation

YOKOTA Atsuko

The verb omou is unique in usage. Since omou expresses an internal feeling of the speaker, the dictionary form of omou can be used only when the subject is the first person, and in this case the subject is often omitted. When the subject is the third person, "omotteiru" should be used instead of "omou," while the first person also sometimes uses "omotteiru."

This makes it rather difficult for Japanese language learners to judge the subjects of omou and the verb in the quotation. In order to seek the general rules of judging the subjects, a small experiment was conducted. The questionnaires were given to Japanese native speakers and the answers were examined. Although the result was limited and tentative, the following points could be mentioned in order to help Japanese language learners.

(1) When the subject of omou is the first person, the dictionary form is basically used. "Omotteiru" is only used when the speaker wants to emphasize a certain period of time of "thinking."

(2) When the subject of omou is the third person, "omotteiru" is used. "rashii" or "youda" can be added to this.

(3) When the verb in the quotation is the volitional form, the subject of the verb and the subject of omou are always the same.

(4) When the verb in the quotation is the dictionary form with "darou," the subject of the verb and the subject of omou are in many cases different.